伝説のテクノロジー
Legendary technology
63

銅版画

美術家・舟田潤子さん

人を楽しませるアート

絵画のエンターテイナーを自認する舟田潤子さん。
自己表現のためではなく、見る人を楽しませるために
銅版画の作品を生み出している。ポップでカラフル、
色遣いの明るい作品が多い理由はそこにある。

絵画のエンターテイナー

「え、これが本当に銅版画？」

舟田潤子さんの作品を初めて見たとき、思わずそんな心の声を口に出してしまいそうになった。

銅版画といえば水墨画のようなモノクロームの世界が思い浮かぶ。だが舟田さんの作品は、赤や黄色、青や緑といったカラフルな色遣いが特徴的で、まるでポップアートのようだ。しかも細かい部分に目を凝らせば、版画の上に和紙を貼り重ねているところもある。ほかの作品を見ると、海を描いたところに橋が架かっていたり、よくよく見ると端のほうで鍋の形をした電車が走っていたりもするのだ。

「見た人がわくわくするような作品をつくることが私の創作活動の原点です。いつも絵画のエンターテイナーでありたいと思っています。よく絵の中に隠し絵のようなものを描くことがあるのですが、それは、作品を家に飾られて時が経ってからも、眺めてもらう時間が長いほど発見や気づきがあったりと長く楽しんでいただけるように、仕掛けをしているような気持ちで描いています。１枚の絵で２度楽しめるかもしれませんよね。自己表現のみを目的にしていないので、自分の暗い部分や悩んでいる部分は絵に表れてほしくないのです」

そういう舟田さんが銅版画に出会ったのは、京都精華大学芸術学部の２回生のときだった。

子どもの頃から人に楽しんでもらうために何かをつくるのが大好きだった舟田さん。姉が芸術系の精華大学に通っていたことや自身も絵や創作が好きだったことから、京都精華大学の芸術学部の版画専攻の学科を選んだ。当時、この学科は版画や絵画だけでなく、紙漉きや、写真、PCの知識など、さまざまな方向から美術を学ぶ機会が設けられていた。その中で銅版画に出会い、気づけば

のめり込むように面白さに魅了されていった。

「それまで私の描く絵は柔らかいタッチでメルヘンチックになりがちでした。銅版画は手で描いたものとまた違い、金属を通すことにより出てくる独特の力強い線が表現できたのです。銅板を腐蝕させてプレスしてつくることで、深みや厚みのある線、にじみのある線も描ける。版を刷ると描いた世界が反転するのに慣れるまで時間がかかりましたが、銅版ならではの風合い、また思いがけない展開や偶然出てくるモノたちも。そこが面白くて、銅版画の魅力にどんどんはまっていきました」

楽しみながら自由に描く

そうして２回生の頃から銅版画を中心として勉強を始めた舟田さんに、オーストラリア国立大学への留学という転機が訪れる。

「日本にいたとき、自分も周りも何だかいつも忙しくしていました。海外で出会った方々は自分の時間をとても大事にして生きています。私もそれを見て、もっと楽しんで生きなければと気がつき、人生観が変わりました」

自分の気持ちの赴くまま自由に絵を描いている画家がいることも知った。

京都市中京区にあるQUESTIONビルの２階、横幅８メートルの壁面アート作品前にて。

ふなだ・じゅんこ　1982年、京都府生まれ。京都精華大学芸術学部造形学科版画専攻卒業。在学中に銅版画家として生きていくことを決め、本格的に創作活動を始めた。フランスやギリシャで制作をしたこともある。2006年、第5回大野城まどかぴあ版画ビエンナーレで池田満寿夫大賞受賞、2010年、第30回カダケス国際ミニプリント展（スペイン）大賞受賞。趣味はスノーボード、シュノーケリング、スイーツ観賞。個展のほか、西陣織、ホテルや企業とのコラボレーションも行うなど活動の場を広げている。

（左上）松やに。細かく削って銅板に振りかける。（右上）凸版刷りの際にインクをのせるためのローラー。（左下）刷り色ごとに分かれている銅板。（右下）刷るときのプレス機にかける力の加減や、色を細かく指定した指定紙。

楽しみながら自由に描く。それから舟田さんは以前よりも自由な気持ちで銅版画と向き合えるようになった。そして大学卒業直前、大阪でアートイベントに作品を出展すると大賞を受賞した。

「銅版画で生きていこう」

そう決意した舟田さんは、就職はせず、銅版画作家としての道を歩みだしたのだった。

14世紀から15世紀頃、北ヨーロッパとイタリアで生まれた銅版画には、いくつかの技法がある。一般によく知られているのは「エッチング」だ。銅板の表面をグランドと呼ばれる防蝕剤で覆い、その上に金属製の棒のニードルで線や絵を描き、腐蝕液に浸ける技法である。そうするとニードルで描いた線の部分が腐蝕し、銅板に線や絵が刻み込まれる仕組みだ。このグランドは通常、松やに、アスファルト、白ロウを一定の比率で混合してつくられる。舟田さんはニードルの代わりに木の小枝を使うこともある。

腐蝕させた銅板の表面に松やにの粉を振りかけて加熱定着させ、さらに腐蝕させることで多孔質の版面をつくり出す「アクアチント」という技法もある。そのほかに「ドライポイント」「メゾチント」「エングレーヴィング」などの技法もある。

オリジナルの技法も開発

舟田さんはエッチングはもちろん、アクアチントやドライポイントの技法を用いることもある。自分が描きたい線の味わいによって技法を使い分けているのだ。

ただ、エッチングなどで使う腐蝕液には劇毒物が含まれていることが多い。人体に悪影響を及ぼすのだ。防蝕剤を取り除く際に、かつてはガソリンや灯油を使っていた。長く続けるために高価ではあるが見直せる範囲はないかと考え、無害の油に変えたという。そのためエッチングの作業ができる場所は限られてくる。また、作業中は細心の注意と装備が必要になる。銅板を腐蝕液に浸けているときは何時間も根気よく腐蝕具合を観察しておかなければならず、根気と集中力が必要だ。さらに大きなものになるとかなりの重量になる銅板を持ち上げ、プレス機にかける作業は肉体的な負荷も大きい。それでも舟田さんがやめないのは、見た人を楽しくさせたいという思いが強いからだ。

舟田さんの銅版画には、サーカスをモチーフにした作品が多い。

あふれ出るイメージはどこから湧いてくるのですか？ の問いに、「日頃から面白いことを見つけています。気になったところを写真に撮ったり、サーカスに行ってパンフレットをもらったり」と舟田さん。

「サーカスをモチーフにしているのは、シルク・ドゥ・ソレイユの公演を見て感動したことがきっかけです。見た人を楽しませたいという私の思いが、サーカスにも共通していると感じました」

サーカスをモチーフに、エッチングやアクアチントといった伝統的な技法を駆使して創作活動をしていくうちに、舟田さんの銅版画はますます自由度を増していった。プレス機にかけて絵を刷った後に和紙を貼りこむようにしたのは、絵の表面に膨らみをもたせたかったからだった。刷った後に絵に色を着けることもあるし、貼った和紙に着色することもある。

西陣織や和菓子店ともコラボ

実は舟田さん、大学で勉強しただけでなく、版画教室に通ったこともある。卒業した大学の研究生となって１年間通った経験もあれば、パリやギリシャで制作活動をしたこともある。そうして銅版画の基礎をきちんと身に付けたうえで、オリジナルの技法を用いるようになったのだ。型をしっかり叩き込んでからその型を崩す、まさに型破りである。

今は銅版画のほかに、和紙で絵を描く和紙絵画の創作もしている。西陣織「となみ織物」や京菓子の老舗「老松」などとのコラボレーションにも積極的に取り組んでいる。アートワークを手がけた「ホテル　グラン・エムズ京都」では130の全客室、メインロビーやエレベーターホールなど、全面的に舟田さんの作品が飾られている。京都のコミュニティ施設「QUESTION」の１階から４階までの壁面には、舟田さんの作品がビルを象徴するアートとして、交流の場をカラフルに明るく彩っている。「Candy Circus」というオリジナルブランドも立ち上げ、バッグやポーチ、コラボレーションの一つとして西陣帯や和装小物をつくるなど、活動は多岐にわたっている。

「銅版画と聞くと『印刷でしょう』といわれることがあります。残念ながら銅版画はまだ正当に評価されていない部分があると感じています。銅版画の社会的な価値をもっと高めるためにも今は１点ものの制作にこだわっています。ゆくゆくは後輩たちが銅版画家として長く続けていけるように、微力ながら力を尽くしていきたく思っています」

型破りな銅版画家として、舟田さんは2022年もさらに新しい道を切り拓いていくつもりである。